国分寺市障害者基幹相談支援センター事業

令和元年度 国分寺市相談支援スキルアップ研修・支援者向け研修
研修開催報告書

日　時	令和元年 12 月２日（月） 18 時 15 分～20 時 15 分	場　所	cocobunji プラザリオンホール
		主　催	国分寺市障害者基幹相談支援センター

１．目的

・市内の福祉・教育の関係者に向け、虐待防止及び権利擁護について普及・啓発する。

・各事業所に年１回の実施が求められている、虐待防止に関する研修の機会を提供する。

２．講師

野澤　和弘 氏

（一般社団法人スローコミュニケーション 代表 / 学校法人植草学園 植草学園大学 客員教授）

３．タイムスケジュール

18:15～18:20　開会挨拶（国分寺市障害者基幹相談支援センター センター長 銀川紀子）

18:20～20:00　講師講演

20:00～20:10　質疑応答

20:10～20:15　閉会・事務連絡

４．参加状況

参加人数：73 名

〈分野別参加実績表〉

分野	事前申込	参加実績	内訳 等
障害福祉分野	43　名	47　名	相談支援事業所５名，共同生活援助事業所３名，障害児通所事業所８名，障害者通所事業所 17 名，居宅介護事業所３名，地域生活支援センター８名，障害福祉課２名，その他関係団体等１名
高齢福祉分野	８　名	７　名	地域包括支援センター４名， 居宅介護支援事業所３名
児童福祉分野	31　名	13　名	学童保育所１名 保育園 12 名
教育分野	２　名	２　名	特別支援学校２名
地域福祉分野等	２　名	４　名	社会福祉協議会１名，民生児童委員１名， その他２名
合計	86　名	73　名	

他，事務局（基幹）４名参加

５．講演内容

一般社団法人スローコミュニケーションの代表，学校法人植草学園植草学園大学の客員教授，そして毎日新聞社の元論説委員であり，障害のある子どもの親でもある野澤和弘氏より，「なぜ人は虐待をするのか～障害のある人の尊厳を守るために～」と題し，制度の移り変わり，記者として取材した虐待事件から見えたこと，障害のある子どもとの暮らしの中で気づかされたこと等の講演があり，その後，質疑応答を行った。

≪講演内容の概要≫

はじめに

虐待防止は，単に虐待がなくなれば良いというだけではない。その本質は，虐待防止の取組を通し，本人たちの生活の質を改善するために，福祉サービスの質を向上させていくことである。

虐待や権利擁護はとても重いテーマのように感じるが，一見するとネガティブなことでも，しっかりと向き合うことで，この仕事のおもしろさや科学性が発見できるのではないかと思う。そしてその先には，本人たちの人生をトータルで考えたときの，生きがいや自尊心を満たすところまで視野に入れて，いろいろなことを考えていきたいと思う。

虐待事件の取材から見えたこと

＜水戸「アカス紙器」事件＞

段ボールの加工工場で 30 人の知的障害のある人たちが，身体的暴力，性的な虐待，賃金のピンハネ等の被害にあっていた。工場の社長は，補助金の不正受給が発覚し逮捕されたが，一番ひどかった性的な虐待の救済には至らなかった。

＜白川育成園事件＞

福祉施設の中で起きた事件。この白川育成園は 1980 年代半ばに建てられた 30 名定員の施設である。当時，東京都内の入所施設への入所を希望する方が，約 1,900 人待機している状態であった。そこに目を付けた男性が，家族を 1 軒 1 軒訪ね，自分に寄付をしたら施設を建て，そこで受け入れると説得し，1 人 800 万円ずつの寄付を集め山奥に施設を建てた。

施設に入所した方は 10 代～20 代の若い方で，多動の方も多く，夕方になると職員の手が足りないので，利用者を部屋に押し込め，なかなか寝ないと大量の睡眠薬を飲ませて眠らせるといった状態が長く続いていた。これを見兼ねた 4 人の女性職員が，都内の弁護士事務所に SOS の手紙を出したことがきっかけで，この施設で行われていた虐待が明るみになり，閉鎖に追い込まれた。

虐待の現場を取材していた当時，虐待されているわが子を守るのではなく，虐待している相手側に回って擁護するような，理不尽な行動をとる家族によく出会った。

水戸「アカス紙器」事件を取材した際も，「このような可哀そうな子どもを，雇ってもらえるだけでありがたい。少々ぶたれても良いのだ。社長は神様だ。」と話す家族がいた。

目の前で，社長からパイプ椅子で背中を叩かれている子どもの姿を見ても止められず，そして止められなかった自分を責め，精神科に通うようになったにも拘わらず，その社長が逮捕された後に，減刑嘆願の署名活動をする家族もいた。

当時は、なぜこのような理不尽な行動をするのか不思議で仕方なかったが，今では重度の障害のある子どもを持つ家族の、この独特の屈折感が自分の中にもあることを否定できない。

家族には，わが子を預けている相手に対する，何とも言えない遠慮がある。もし自分の知らないところで，子どもが意地悪されていたらどうしよう。自分が老いて亡くなった後も，ちゃんと支援してもらえるのだろうか等を考えたら，怖くて喧嘩なんかできない。

家族はこの子のためと思って，いろいろやっている。しかし，よくよく考えて直してみると，そのうちの多くは自分たちが不安感から逃れるために，そして自分自身の安心感を得るためにやっているのではないかと感じる。それでも大抵のことは子どもの幸せと重なり合うが，時と場合によっては，背中合わせになってしまうこともある。そのようなときに立ち会う，第三者である福祉職員や学校の先生等は，非常に重要なキーパーソンになると思う。

家族と本人と支援者は，微妙な関係で成り立っている正三角形であると思う。特に障害が重度であったり，子どもが小さいときは，家族の思いの方が強いため，形が歪んで潰れてしまうことがある。その時に第三の頂点である支援者が，どのような立ち位置をとるかが大変重要である。

目の前で，わが子が殴られているのを見て，「少々ぶたれたって良いんです。」と本気で思っている家族は，絶対にいない。そう思わなければ不安で仕方がないから，そのように言ってしまうのである。その家族の言葉を鵜呑みにしないで欲しい。なぜそのようなことを言ってしまうのか，その言葉の裏側にある家族の屈折した心情の方に，常に目を向けて欲しい。その時に支援者は，子どもの側に目を向け，立ち位置をとって，いろいろやってくれると良いのではないかと思う。

家族は真実がわかると劇的に変わる。水戸の事件でも，白川育成園での事件でも，当初は擁護に回っていた家族が，真実がわかると 180 度立場を変え，絶対に許さないと声を上げた。このように，屈折した状況から家族を解放してあげて欲しい。

障害者の権利擁護制度「障害者 110 番」

障害者 110 番は，滋賀県で起きた「サン・グループ事件」がきっかけとなり，滋賀県が最初に作り，やがて全国に波及していった。ある人は，この制度はないよりは，あった方が良い。しかし本当に困っている人は，なかなか声を上げてくれないと話していた。

本当に困っている人が，声を上げられない理由の一つに，障害が重度であるが故に，自分の身に起きていることを理解できていないことが挙げられる。

水戸の事件でも，ある女性利用者の母親が，娘の行動に疑問を感じ，一体工場で何をされているのだろうと恐る恐る調べたところ，ひどい性暴力にあっていたことが判明した。本人は，自分が被害に合っているのかわかっていない。それでも屈辱感や苦痛を感じながら，人権を踏みにじられていたという残酷なことがあった。

もう一つは，本人なりに嫌であるということをアピールしているが，その方法が，大きな声を出して暴れる，自分を叩く，まわりの人に噛みつくといった，行動障害とラベリングされる行為であるために，まわりの人から理解されないことが挙げられる。

なぜ本人がそのような行為をするのか，ということを丹念に辿っていくと，虐待を受けていたり，劣悪な環境に放置されていたり，様々な刺激に対して弱いにも拘わらず，適切な配慮がなされていなかったりと，環境や支援の在り方に問題があることがわかる。しかしそこには目を向けず，本人の行動だけを見て，この人は厄介な人，難しい人であると，本人の問題にされてしまっている。なんと理不尽なことだと思う。

では，言葉が話せる人は被害を訴えることができるのかというと，そういうわけではない。いじめの事件をみれ

ばわかるように，障害がなくても被害に遭い続けていると，自分で訴える気力さえ萎えてしまう。言っても無駄だ，もっとひどい目に合ったらどうしよう，自分にはそんなことを言う資格はない，恥ずかしい思いはしたくない等の無力感に苛まれている。

障害者虐待防止法の制定

障害者虐待防止法の中で定義されている，加害者になり得る人は，家族，福祉職員，雇用の現場のスタッフや管理職である。本来ならば，ここに学校の先生や病院のスタッフが入らなければいけないのだが，ここを切り取って障害者虐待防止法が作られた。

この法律の建てつけとしては，国民に通報義務を課して，虐待の類型を決めて，市町村に虐待防止センターを設置し，調査等を行うとしている。

そして最も重要なことは，必要のない身体拘束は虐待であると認められ，定義されたことである。これにより，日本の障害者福祉は，かなり変わってきた。

「虐待」をどのように捉えるか？

「虐待」をどのように捉えるか，ということがとても大事である。「虐待をしたことがありますか？」と質問した時に、「あります。」と答える人はいない。しかし、「支援をミスしたことはありますか？」，「障害者に悲しい思いをさせてしまったり，傷つけてしまった経験はありませんか？」と質問すると，「ある。」と答える人は，多くいるのではないだろうか。どんなに素晴らしい良い職員でも，絶対にミスはする。そして，権利侵害の芽が出てこない現場はあり得ない。

ミスをしていながら，それに気が付かない職員はどれくらいいるだろうか。しかし，本当は自分のミスに気が付いていながらも,何も言わないだけである。まわりも気が付いていないみたいだから，次にミスしてしまったときにはちゃんと自分から認めようと，その場をやり過ごしているのだと思う。これでは，次に同じことが起こっても，自分のミスを認めることができなくなり，徐々にエスカレートしてしまい，見て見ぬふりだけでは済まなくなってしまうことがある。

どんなに良い職員，どんなに良い職場であっても，権利侵害はある。支援のミスは起きる。だから，そんなことは恐れないで欲しい。そこを恐れてしまうと，ミスを認められなくなってしまう。真に恐れて欲しいのは，支援をミスしていながら，権利侵害の芽が出てきていながら，それに気が付かない感性の鈍さである。または，自分はそんなことしないと高をくくり，勘違いしている高慢さを恐れて欲しい。

ポイントとしては，権利侵害の芽が出てきていたり，支援をミスしてしまった時には,必ず自分から，まず口に出すことである。同僚に言う，または，管理者に相談する。これがポイントである。

なぜならば，誰でも自分のミスは自分で認めることができる。しかし，他人から指摘されることは，受け入れ難いものがある。特に後輩から指摘を受けた場合には，意地でも否定したくなってしまう。だからこそ，自分から言うことが大切なのである。

そして，自分から言ってくれた人の感性の豊かさや，謙虚さをみんなが認め合う，そんな職場を作って欲しい。それをみんなで話し合いながら，より良い支援へ転換していくことに尽きると思う。

自分の都合の良いように解釈していませんか？

私は子どもに手を挙げたことは一度もない。自分は完璧な父親であると自惚れていた。しかし，これは大間違いであり，これに気づかせてくれたのは子どもであった。

ある日，家族でランチを食べに行く約束をし，家族もとても楽しみにしていた。ところが，レストランに向かう道

中で仕事場から連絡が入り，家族を残し仕事場に向かわなければならなくなってしまった。当然，家族は怒るのだが，障害のある子どもはニコニコと手を振って見送ってくれたので，とても救われた気がしていた。

障害のある子どもは言葉の意味がわからないので，その場ではニコニコ手を振ってくれていた。しかし，到着したのがレストランではなく自宅であったときに，違うことに気が付きパニックになる。家族としては，時間と場所が違うところで本人がパニックになるので，何が原因でパニックになっているのかわからなくなってしまい，本人に対し，やめなさいと制止することになる。

もし，本人が言葉を話すことができたならば，楽しみにしていた家族でのランチがなくなってしまったことに対し怒っているのに，どうして障害がある人は何を考えているかわからないと，片づけられてしまうのかと言うに違いないと思う。

家族からすれば，せめてその場でパニックになってくれれば，原因もわかるし，謝ることもできる。そして次の埋め合わせを考え，反省することもできる。ところが，その場ではニコニコしながら手を振ってくれているものだから，勝手に励まして見送ってくれていると，自分の都合の良いように解釈してしまう。現場で支援しているときに，このような状況はありませんか？

人間は完璧な生き物ではない。利用者の立場に立ってものを考えましょうと，よく教えられるが，これができるのは，余裕があるときだけだと思う。忙しいとき，体調が優れないとき，心配事があるときには，自分の側でしか物事を考えられない。このようなとき，対等な人間関係ならば,相手から注意を受けたり，やり返されたりすることで，自身のミスに気が付くことができる。ところが，ニコニコ笑顔で手を振られてしまったら，自分の都合の良いように意味づけてしまう。これが怖いところである。

風通しの良い職場環境が重要

どの虐待事件も，最初は小さなことから始まっている。そして，基本的な構造は同じである。まず一つに，外からの目が入らない，密室化というのがある。これは非常に恐ろしい。密室化した中で，独善で始まると徐々にエスカレートして，世の中の常識と乖離し，とんでもないことになってしまう。ひどいことしていても，これも支援であるというようになってしまう。

ある施設では，施設の遠足で公共交通機関を利用した際に，他の乗客の迷惑になってはいけないと言って，大きな声を出す自閉症の女性利用者の口にガムテープを貼り，両側に男性職員を配置し，利用者の両手首を押さえつけて乗車した。周りの乗客はびっくりした顔で，その状況を見ていたという。

しかし職員は，何で周りの乗客がこちらを見ているのかわからない。自分たちは，他の乗客に配慮するためにやっているのに，なぜ咎められるように見られているのかわかっていなかった。これぐらい，世の中の常識と乖離してしまっていたのだ。

その後，施設長が変わり，この施設は劇的に良くなった。どうやったのか質問したところ，その施設長は「風通しを良くした。」と答えた。職員が利用者を怒鳴りつけていないか等のチェックリストを作り，施設を訪れる家族や行政職員，実習生等に渡し，チェックしてもらったとのこと。

初めは，自分たちが監視されているようで嫌だと，職員から批判があった。しかし，これは監視ではないこと，自分たちはプロであるが，プロだからこそわからなくなってしまうことがあること，だからこそ素人の目を借りて，自分たちの支援がどのように映るのか，チェックするために実施するのだと説得したとのことであった。

初めは反発していた職員も，徐々に第三者の目を意識するようになり，改善につながっていったとのことであった。この風通しの良い構造は，虐待防止における決定的なものかもしれないと思う。

「許される支援」と「許されない支援」の線引き

「許される支援」と「許されない虐待」の線引きについて，よく質問されることある。これは非常に難しい。殴る，蹴る等の身体的虐待や，性的虐待，経済的虐待についてはわかりやすいが，心理的虐待は難しい。

ある知的障害の男性から，こんな話を聞いたことがある。かつて入所施設にいたときに，優しくてとても頼りになり，いつも自分と遊んでくれる大好な支援者がいた。その支援者とは，新聞紙を丸めて，よくチャンバラごっこをして遊んでいた。痛くはないのだけれど，小さいころに，馬鹿にされたり，頭を叩かれたトラウマが蘇ってしまうので，頭を叩かれることだけはすごく嫌だった。しかし，その支援者は自分を楽しませるために遊んでやっているのだということはわかっているので，この支援者の気持ちに答えなければ，今後も自分と遊んでくれなくなってしまうのではないかと思い，怖いけれど必死になって楽しそうな表情を作っていた。でも，心の中ではいつも泣いていたとのことであった。

我々は，今目の前にいる人が何を考え，何を感じているのかということを，あえて相手に確認をしない。そして，自分の経験や主観に照らし合わせながら推測している。しかし，障害のある方たちは，我々とは違う経験や違う主観を形成しているため，同じ行為や同じ言葉であっても，全く違う感じ方をしていることがある。彼らの発信する小さなシグナルをキャッチするためには，我々はこのことをよく理解していなければならない。

この障害者虐待防止法やガイドラインは，最低限の取り決めに過ぎない。そして，障害福祉（児童・高齢も含む）の世界は，不安定で不確実で複雑で曖昧であるため，常にグレーゾーンが現れる。このグレーゾーンを，どのように自分で判断して律していくのか，自分の中に中心となる物差しを作っていくことが重要である。

どの職場も，上司や先輩が作ってきた非常に強い暗黙のルールがある。その同調圧力が強い中で，ちょっとした疑問を言葉に出して，改善につなげていくことはなかなか難しい。だからこそ，自分の中で，自分の頭で考え抜いて，規範やモラル，美意識を身に着けていくしかないと思う。しかし，自分一人で行うことは難しいため，これはちょっとおかしいのではないかと思ったときには，必ず相談できる人とお互いに確かめ合いながら，その物差しを築き上げていってほしい。このグレーゾーンを線引きするのは，人工知能等ではできない，人間にしかできないことであると思う。

虐待のリスク要因

虐待のリスク要因はいろいろある。法人のガバナンスや理念が職員に周知されているかどうか，職員の賃金や休日の確保といった待遇面，人材育成のための研修が実施されているか，困ったときに相談できる仕組みがあるか等も重要なリスク要因である。このようなことを考えずに，ただ単に虐待をしてはいけませんと言った精神論だけでは，虐待防止のための取組としては不十分である。

そもそもこの福祉の業界に入ってくる人の中に，障害のある人を虐めてやろうとか，虐待してやろうという人はいない。しかし，行動障害のある方などの支援の難しい方を支援している中で，不全感を感じ，どうして良いかわからなくなってしまい，虐待の方にズルズルと引きずり込まれていってしまうこともあるのではないかと思う。

それでも，職員の個人的な問題もあると思う。津久井やまゆり園での事件のような価値観をもった人が，入職してきたら大変だと思う。そういうことを想定しながら，良い職員を，利用者を守るための様々な取り決めや，採用方法，研修の在り方，職員配置などを施設側の責任として考えていかなければいけないと思う。

力任せ、その場しのぎは破綻する

虐待防止法では，必要のない身体拘束は虐待であると定義した。では，必要性はだれが決めるのかということだが，厚生労働省は，押さえつけている支援者には判断できないとしている。そのため，しっかりとしたルールの取り決めがなされた。

それでも，本人の生命に危険があり，やむを得ず身体拘束せねばならないときもあるため，そのときには，必ず記録に残すことを義務付けている。

なぜ，ここまで厳しく取り決めているのか。それは，本人や周囲の人を守るという名目で行われている身体拘束が，守っていることに全くつながらない場合が多々あるからである。むしろ身体拘束することで，本人のストレスを高め，本人の行動障害を強化している場面の方が多いのではないかということである。

正直に言うと，自分も障害のある子どもに身体拘束をしていた。子どもは床屋が苦手であった。はさみが耳のあたりにくると嫌がって暴れるので，はさみで顔や目を傷つけないようにするために，子どもが暴れないように押さえつけ，その間に髪を切ってもらっていた。

こちらは子どもを守るためにそうしていたが，子どもからすれば，怖くて，逃げたくて暴れているのに，逃げられないように力で押さえつけられるものだから，もっと怖くなり，さらに強い力で暴れる。そのため，こちらはそれに負けない力を使わざる負えなくなる。そうすると，子どもはもっと怖くなり，もっと暴れる。こちらはさらに強い力で抑えることになるという，逃げ場のない堂々巡りにはまり込んでしまう。しかし，これは必ず破綻する。年を重ねるごとに，子どもの力の方が強くなるからである。

最終的には，罠にかかった獣のごとく暴れる子どもを，大人二人がかりで押さえているものだから，子どもの恐怖は極致に達し，立ち上がりパニック状態になり，床屋にある重たい大きな椅子が倒れ，床に転がっていた。

その場しのぎ，力づくでやっていたことは，全く子どものためになっていなかった。それどころか，どんどん本人に負荷をかけ，エスカレートさせていた。

<u>本当に他の方法はないのか？</u>

このときのこちらの心境としては，他に方法があるのならこんなことはやりたくない，他に方法がないから仕方ないと，自分を納得させるためにそのように思っていた。しかし本当は，他に方法がないのではなく，他の方法を探していないだけである。なぜなら，忙しいから，面倒くさいから，そんなものないと思っているからである。そして自分の弱味を，人に言うのが嫌だからである。全て自分だけの都合である。子どもの方の都合は，一つも無い。

その後，恥を忍んで何人かに相談したところ，良い床屋を紹介してもらった。やはり相談してみるものだなと思った。実際にその床屋に子どもを連れて行ったら，一度も本人を抑えることなく，店主が一人で子どもの髪を切ってくれた。他の人からは，その店主はどうやって本人の髪を切っていたのかとよく聞かれる。しかし，うまく伝えられないが，とにかく時間をいっぱい使ってくれた。

初めてその床屋を訪れたときに，本人は耳元の部分の髪を切られることが苦手なので，こちらで本人を押さえておくので，その間に切って欲しいとお願いしたが，そこの店主はそれを良しとはしなかった。髪を切るのが自分の仕事だから，手は出さないでほしいと言われてしまった。

店主は，本人の反応を見ながら様々な方法を試していたが，どれもうまくいかなかったようで，手を止め，ボーっと考え込み始めた。子どもは，次は何をされるかと思い，店主を警戒して見ていたが，しばらくすると本人もその店主につられ，ボーっと鏡を見ていた。しばらくすると，店内がシーンと静かになり，空気がスーっと落ち着いていく感じがした。そのとき，店主がそーっとはさみを持って,チョキチョキっと髪を切った。しかし，子どもが嫌がるので，店主は再びはさみを置き，またボーっと考え始めた。すると子どもも，またボーっと鏡を眺め始めた。そして再び店主が，チョキチョキと髪を切る。これを何度か繰り返し，髪を切り終えた。髪を切り終えたとき，子どもはその店主に惚れ惚れとした視線を送っていた。

かつて別の床屋で大暴れしてしまったあと，本人はギューッと奥歯を噛み締め，自分で自分の腕に爪を立て

ていた。大暴れして床屋さんを困らせ，父に恥ずかしい思いをさせてしまったことを，本人もわかっているのだと思う。しかし，この店主は，その恐ろしい状況から自分を解放してくれたという，惚れ惚れした表情で店主を見ている本人を見て，涙が出そうだった。

床屋も，いつどんなお客さんが入ってくるかわからない，難しい商売である。それでも，どんなお客さんの顔にも，刃物を当てるのが仕事であるため，お客さんをリラックスさせたり，特性を掴んだりすることは得意ではあると思う。しかし，福祉の勉強をしてきた人ならば，もっとうまくやることができる人がたくさんいると思う。

自閉症の方や，支援の難しいタイプの方は，ちょっと厄介な行動だったり，ちょっと危険なことをしたりすることがある。それを支援者が，どのように捉えるかによって，虐待みたいなことに傾いてしまう現場になるのか，とても良い支援ができる現場になるのかの分かれ道になると思う。

合理的・科学的なアプローチが重要

感情的で情緒的な対応をするところは，虐待が蔓延し，合理的で科学的なアプローチをしているところは，良い支援が行われている。

例えば，ザワザワした場所が苦手な障害児が，下足場で隣の子どもに噛みついてしまう場面がある。対応が素人的なところは，なんでそんなことをするのだと，本人を叱る。合理的で科学的なアプローチをする，支援の上手なところは，この子はなんで噛みついてしまうのか，感覚過敏があるのかもしれない，コミュニケーションの困難性や，想像力の困難性があるのではないだろうかと，科学的な目で見て考える。そして，どんな感覚過敏があったとしても，そこに騒がしい環境がなければ，そこに的確な支援ができる職員が一人いたら，未然に防げるはずであると考える。

このザワザワした騒がしい環境があることや，的確な支援が出来る職員がそこにいないということは，この障害児のせいなのでしょうか。これは施設の問題であり，職員の問題である。感覚過敏があることや，コミュニケーションの困難性，想像力の困難性があることは，もって生まれた先天的な障害特性であるので，簡単には改善できないにもかかわらず，こっちにばかり目が向いていないだろうか。

つまり，施設や職員側の努力や工夫で，なんとでもできるものが目の前にありながら，意外にそこには目が向いていない。そして，どうにも改善が難しい本人側にばかり目を向けて，手を突っ込んで，ますます本人を混乱させたあげく，障害者の支援は難しい，行動障害は厄介であると簡単に考えていないだろか。

もちろん，噛みついてしまう要因は他にもあると思う。本人のその日の体調や他の子どもとの相性など，そのひとつひとつを丁寧に洗い出しながら，いろんなことを考えていき，出来るところから取り組んでいくことが大切である。そのためには，日常の行動観察がとても重要である。そして，問題行動の背景にある要因を明らかにし，その行動を誘発させない予防的支援を基本にしてほしい。

家族や支援者の価値観のバイアス（偏った見方）は，本人に影響を及ぼす

イギリスの自閉症協会で研究をしている，リチャード・ミルズ氏が日本に来日し，応用行動分析（ABA）の専門家とシンポジウムを行った際に，どんなに本人を観察しても，その観察からわかる刺激はほんの一部であると話していた。なぜならば，刺激の多くは，本人の心の中で起きているからである。また，最も本人にストレスや刺激を与えているのは，家族や支援者であるとのことであった。そのため支援者は，本人を観察するのではなく，家族や支援者の方を観察しなければならない。どんな家族も，どんな支援者も，障害に対する価値観のバイアスがあり，そのちょっとしたバイアスが本人に大きな刺激を与えてしまっているのだ。その自分が持っている価値観のバイアスに気が付き，そのバイアスをなくしていくことが，本人の行動障害の改善に，はるかに効果があることがわかったと話していた。

非常に良くわかる。障害のあるわが子がパニックを起こした後，必死になってこちらの目の奥をのぞき込んでくる。本人からすれば，こちらは命綱であるため当然かもしれないが，自分は嫌われたりしていないだろうか，暴れたことをこの人はどういう風に見ているのだろうかと，必死になって見ている。

またこんなことやってと，こちらのちょっとした心の変化を,ものすごく敏感に読み取っている。このちょっとした心の変化というのが，価値観のバイアスである。これは誰でも持っているし，咄嗟のときに出るものである。しかしそれが，本人にものすごいストレスと刺激を与えている。だからこそ，こちらを変えなければいけないのだ。

地獄の底に沈めるか，楽しみのある生活をもたらすかは，職員次第

千葉県で実施した虐待防止研修の中で，行動障害についてのスーパーバイザーでもある，鳥取大学の井上雅彦氏が，こんな話をしてくれた。

ある施設に，自分の拳で自分の頭をガンガン殴っている，行動障害のある男性利用者がいた。このまま放置していたら失明してしまう可能性もあるので，家族との相談の末，拘束衣を使用することとなった。しかし，今度は机に頭を打ち付け始めたので，本人の体を椅子の背もたれに固定し，机に頭をぶつけることを阻止した。すると，本人は腕も伸ばせないうえに，さらに椅子に固定されてしまったので，さらにストレスが溜まり，力づくで椅子を引きずって壁際に移動し，今度は壁に頭を打ち付け始めた。職員もどうして良いか途方に暮れてしまい，あとの手段としては、薬で動きを抑制することぐらいしか考えられない状況にまで追い込まれていた。そんなときに，井上氏がスーパーバイザーとしてその施設に招かれた。

まずは，応用行動分析の手法を用いて，本人が頭を叩いてしまう，引き金になっている刺激を見つけ，その刺激となっているものを取り除こうと取組み始めたが，なかなか見つけることはできなかった。

ある日職員が，本人の気持ちが知りたくて，自分の頭を同じように叩いてみたところ，ものすごく痛かったが，軽くトントンとする分には，疲れているときには心地よい刺激であると話し始めた。周りの職員は笑っていたが，井上氏はこれを聞いてハッとした。これまで我々は，本人の行動を自傷行為と捉えていたが，この職員が言うように，本人は振動や刺激を欲しているだけなのではないだろうかと考えを改めた。そして，本人が傷付かない方法で，頭に刺激や振動を与えることはできないだろうかと考え，取組み始めた。ペットボトルやボールなどで試してみたが，なかなかうまくいかなかった。しかし，一つ通用するものが見つかった。それは音楽であった。

ドラムやベースのビートが激しく，スピーカーが震えるような音楽はどうだろうかと，本人にヘッドホンを装着してもらい，支援者がボリュームを上げ下げして試してみたところ，本人はニコニコと嬉しそう顔をして体を揺らしていた。それを見た支援者は，これが通用するのかと，みんな唖然とした。それから，音楽を日中の様々な活動場面にも取り入れてみたところ，本人の頭を叩く行為は，嘘みたいになくなったとのことであった。

殴るから拘束衣を着用する，それがうまくいかないから，さらに縛るといったような対処療法では，どんどん本人の自由を奪っていき，最終的には生きているのか，死んでいるのかわからない状況にしてしまう。一方で，音楽の楽しみをもたらすことで，本人をそのような状況から解放することができる。

つまり,職員のセンスや努力ひとつで，生きにくい人を地獄の底に沈めてしまうこともできれば，音楽のある楽しい生活をもたらすこともできるのである。

ポジティブなアセスメントと環境を整えることが重要

5 年ほど前に，北海道にある，社会福祉法人はるにれの里を見学したことがある。当時グループホームの入居者 151 人おり，そのうち強度行動障害の認定を受けている支援区分 6 の方は 102 人であった。その中には，入所施設でも受け入れを拒否され，精神科病院でも嫌がられるような,自身の指を肛門につっこんで，腸を引きずり出して血だらけにしてしまう人もおり，どのように支援しているのか不思議で仕方なかった。普通に考えた

ら，絶対にそのような行為をさせないようにベルトをきつくする，ミトン型の手袋を装着する等の対応を考えると思う。しかし,そんなことしたらますますストレスがたまって他の行動障害が現れてしまうため,ここでは基本的にそのような対応をしないとのことであった。

では，どのように支援しているのかと質問したところ，やはりアセスメントが重要であると話していた。アセスメントと言うと，何が苦手で,何ができない等，本人のネガティブな面に注目が行く。もちろんそれも必要だが，ここではポジティブなアセスメントが重要であると話していた。

このような行動障害がある方でも，好きなことがあるはずである。食べ物は何が好きなのか，テレビ番組は，音楽は，色は，どういうときに落ち着いているのか，相性の良い相手は誰か，得意な作業は何か等，とにかくその方の良い面を探し出す。すると，徐々に本人の行動も変わってくる。そして良い支援をすれば，また違った面が見えてくる。このようにポジティブなことを，居住の場や日中のプログラムに組み込み増やしていくと，相対的に行動障害も徐々に減ってくる。もちろん，口で言うほど簡単なことではない。初めの頃は，職員を 2～3 名配置していたため，運営は大赤字であったとのこと。しかし，徐々に上手くいった成功例が出来てきたことにより，だんだん職員の配置人数を減らしていき，最終的には 1 名の職員で，5～6 名の行動障害のある方を支援できるようになったとのことであった。

部屋も見せてもらったが，一人ひとりに対し試行錯誤しながら，オーダーメイドで居住環境を作り上げていた。押し入れに簡易的なスヌーズレンを作っている部屋もあった。この部屋の利用者は，ときどき混乱して暴れてしまうことがあったが，押し入れに簡易的なスヌーズレンを作ったことで，落ち着いて生活することができるようなったとのこと。

北摂杉の子会の松上利男氏のところにも見学へ行ったが、ここもグループホームの入居者はほとんどの方が行動障害で、支援区分6の方である。しかし，ほとんどをパートスタッフがまわしている。松上氏曰く，本人の特性をつかみきって，本人に合った支援を組み立てることができれば，パートスタッフでも十分に支援が出来るとのことであった。

また，それぞれの部屋の温度と湿度を集中管理していた。温度の管理は大事であると認識しているところも多いが，湿度の管理も重度の障害がある方には非常に大事であり，ちょっとした湿度の違いで体調に変化が出て行動障害を引き起こしたりすることがあるとのことであった。その他，光も本人に影響を与えている場合があるとのこと。我々には感じないが，本人にとっては刺すような痛みを感じていることもあるようだ。それは数値では表せないため，一人ひとり様子を見ながらいろいろ試行錯誤し，この人はどういう光ならば落ち着いて生活することができるのか，長年かけて見つけていくと話していた。

<u>SPELL の理念</u>

自閉症協会が提唱している SPELL の理念がある。これは，難しい障害の方に対して，Structure（構造化），Positive approach（良い面を見ていく），Empathy（共感），Low arousal（刺激の少ない環境），Links（つながりあっていく。自分たちだけで支援を完結させず，支援の選択肢を広げていく）という意味である。

まず障害特性をよく理解すること。そして，環境を整えることは決定的に大事であると思う。また，本人をポジティブに見て，本人の自尊心を守ることも大事である。

<u>生活の楽しみを</u>

生活の中に楽しみがあることが，大切になってきたなと思う。我々も大変な仕事や人間関係のストレスがあるが、それに耐えられるのは楽しいことをいっぱい知っているからである。嫌なことがあっても，お酒を飲んでワイワイ騒げば忘れることが出来る。しかし，障害のある方は楽しみが少なすぎる。

福祉サービスは絶対に必要だし，権利擁護も絶対に必要であると思う。しかし，それだけを目的化しては、絶対にいけない。福祉サービスや権利擁護を使って，彼らにどんな人生を歩んでもらうかということが大事である。

そのためには，利用者像を変えなければいけないと思う。問題行動を改善する，福祉サービスを受ける，それだけではなく，社会にもっと能動的にかかわって人生を楽しむ人というアイデンティティを障害者に構築しなければいけないのではないかと思う。

そして，職員のアイデンティティも変えなければならないと思う。可哀そうな人を支援してあげる，できない人を支援してあげる，そんなアイデンティティではいけない。そんなものに縛られていたら，いつまでも3K 職場で働く単純労働者という呪縛から逃れられない。

しかし，この福祉の仕事はそんな仕事ではない。この仕事に従事する職員は，彼らの生きにくさを理解し，適切な環境や支援によって，障害のある人たちの幸せを作り出せる人である。そして，障害のある人たちの豊かな地域生活を実現し，それを支援し社会の側にも多様性をもたらすことができる，そういう創造性に富んだクリエイティブな仕事をしている人である。

障害者福祉の現場こそが社会の希望

重度の障害のある子どもを持つ親にとって，親亡き後の未来は不安である。どんなにお金を残しても，どんなに良い施設が出来ても，どんなにすばらしい制度や法律が出来ても，自身が亡くなった後の社会がどうなるのかはわからない。そのため，最終的な安心には手が届かないような気がする。

6 年ほど前から，東京大学で「障害者のリアルに迫るゼミ」という自主ゼミの講師をしている。この学生たちと真剣な議論したり，一緒に勉強したり，いろんな現場に行って合宿等をやって，夜遅くまで語ったりしている中で，もう自分がいなくなった後の未来の宇宙に向かって，望遠鏡を覗いているような気がすることがある。

今の時代，優生思想のような考え方の人もいると思うし，これからも出てくると思う。しかしそれに負けないくらい，優しい心を持って，生きるってこんなに面白いと感じてくれるような，人材をたくさん作っていきたいと思う。

今では，支援の難しい障害のある方を支援している現場がいっぱい出てきた。そして，地域の障害者福祉の現場こそが，この先の日本の社会の希望のような気がする。

障害福祉の現場で働いている人には，是非プライドを持って，良い支援の現場を作っていってほしい。それが，虐待の防止に決定的に一番効果がある道だと思う。

≪質疑応答≫

Q：優しい心を持って，生きるってこんなに面白いと感じてくれるような，人材をたくさん作っていくためには，やはり障害当事者と一緒に動くことが重要なのではないかと思うが，このようなやり方が良いというような秘訣があれば教えて欲しい。

A：今年の秋から厚生労働省が少し予算を付けてくれ，東京大学で行っている「障害者のリアルに迫るゼミ」を、京都大学や早稲田大学、東京工業大学、植草学園大学、関東学院大学などの 9 カ所の大学で実施するようになった。今後はこのゼミと，地元の社会福祉法人や NPO 法人がバックアップしていくということができないかと考えており，そのモデルとして，来年から千葉大学と千葉県内の若手の法人の理事長や代表たちと実施することになった。

この取組を実施することで，教室と福祉の現場，あるいは当事者の生活の場と直結するパイプのようなものを少しずつ作っていき，現場のリアルを教室にいる学生たちに知って欲しいと思っている。

実際にこのゼミに参加した学生のリアクションペーパーを見ると，普通の授業では感じないようなことを，学生たちは感じてくれている。障害当事者の力は我々が感じている以上に，今の子どもたちに響くような気がしている。このことを厚生労働省にも理解して欲しいし，いろんな大学や社会教育の方にも理解していただきたいと思っている。

余談ではあるが，今福祉現場はどこも人手不足である。一方で，大企業は軒並み大リストラを敢行している。生産性を上げるため，多くの仕事が AI 化してきており，その波についてこれない給料が高くて，頭の固い口だけ出してくる中高年はリストラされている。そのため，これまでとは違った労働市場の局面が，これから数年かけて起こるのではないかと思う。そういう局面においても，福祉の現場は極めて重要な役割を果たしてくるのではないかと思い、現在厚生労働省に働きかけを行っている。

６．まとめ

昨年度より毎年１回，権利擁護・虐待防止をテーマに，市内の福祉・教育の関係者に向け研修を開催することになり，今年度はその第２回目として，虐待の実態や虐待がなぜ起こるのか，虐待やそれにつながる虐待の芽について感じる力を養う，障害のある人の尊厳を守るために支援者に求められていることを学ぶことを目的として講演会を行った。

障害福祉分野に限らず，高齢福祉分野，児童福祉分野，地域福祉分野，教育分野等，障害者(児)支援関係者を広く想定した形での周知を行った。今年度は教育分野からの参加があったことは，今後の支援ネットワークの強化を目指していく上で，評価すべき点であると考える。

今回の研修会では，虐待事件を取材してきた記者であり，障害のある子どもを持つ親でもある，野澤和弘氏ならではの話を通し，虐待防止は単に虐待をしないということだけが，虐待防止の取組ではないことを学んだ。そして，支援の質を向上させ，本人の生きがいや自尊心を満たす視点を持つことが重要であり，この福祉の仕事は，障害のある方の豊かな地域生活を実現し，社会の側にも多様性をもたらすことができる，創造性に富んだクリエイティブな仕事であることを，参加者全員が再認識した。

研修アンケートからも，単なる虐待防止の話ではなく，本人の人生を支えることが大切であり，その主人公は当然ながら本人である。利用者中心の支援，支援の原点を今一度しっかりやっていかなければと思った。虐待にとどまらない，障害とは何かを考えさせられる，大変深みのある内容だった。元気が出た。また明日から頑張ろうと思った，という感想が多くあり，参加者にとって多くの学びと明日からの活力を得ることができた研修であったと思われる。

また自閉症や強度行動障害、発達障害への対応や児童福祉分野についての研修も開催してほしいという要望もあり，今後の研修内容を検討し企画する。

７．参加者アンケート集計報告

参加者：73 名　アンケート回収：58 名（回収率　79%）

①本日の研修はいかがでしたか。

たいへん参考になった　：52 名（89%）
参考になった　：10 名（11%）
普通　：　0 名
あまり参考にならなかった　：　0 名
その他　：　0 名

【講演全体の感想・意見】

・障害支援の仕事はクリエイティブな仕事だと思えた。
・日ごろの支援を見直すことができ，元気がでて，また明日から頑張ろうと思った。
・実例が多く，わかりやすく実感が持てた。
・人としての生き方＝人生のお話で，感動し泣きそうだった。今，聴けて良かった。
・様々な支援者，法人（施設）の行動障害のアセスメントや環境整備，調整の実勢について参考になった。
・実感のこもった言葉に，胸に響いた。
・単なる虐待防止の話ではなく，本人の人生を支えることが大切であり，その主人公は当然ながら本人であることを再認識した。利用者中心の支援，支援の原点を今一度しっかりやっていかなければと思った。
・自分や家族やかかわる人たちの「人生」について深く考えさせられた。
・物事を側面から見ることが大切だ。
・障害特性をよく理解しながら，環境を整える。
・印象に残るキーワードが盛沢山で，とても参考になった。
・虐待にとどまらない，障害とは何かを考えさせられる，大変深みのある内容だった。
・無駄な話が一切なく，意見や考えを押し付けることなく，スッと心に響いた。
・虐待をつくりだしているのは，支援者の関わり，というところが印象に残った。
・当たり前と思っていた自分が，当たり前ではないことに気づかされた。
・保育の分野にも当てはまる部分があり参考になった。
・保育歴 22 年目である。いろいろな障害児と接してきた。苦悩もあった分とても一つひとつが思い出である。子どもたちとは，今でも交流がある。成長は，とても感慨深いと感じる。自分は何もできなかったのではと思ったが，とにかくコミュニケーションだけは大切にしてきた。講演を聴いて元気がでた。
・野澤さんの記者の目，親の目を通して語られるエピソードが，自分に重く刺さった。
・最近の自分は忙しさを言い訳にし，物事や言動の背景を考えることが少なくなっていた。
・福祉サービスが目的ではなく，利用者の豊かな地域生活につながるものだ，という思いが当初に比べ薄らいでしまっていることに気づいた。
・乳児，幼児，学童を中心に活動，体験を父母とともに学んでいくことで生きにくさは変わると思う。親と共に，小さいころから，愛おしみながら積んでいくことで尊厳につながると思った。
・重くなりがちなタイトルだが，この講演会で心が軽くなった。
・保育をしているなかで，安心感を作り，育ちあうことの意味が少しわかったように思う。

②「虐待防止のとりくみの重要性」について理解できましたか。

よく理解できた　：42 名（72%）
理解できた　：17 名（29%）
普通　：　1 名
あまり理解できなかった　：　1 名
その他　：　1 名

③今後、実際の業務で取り組めそうなことはみつかりましたか。

▸工夫できること、意識できること

【講演内容からの自己覚知】
・行動障害のある方が，周囲へ何を伝えたいのか，どのようにコミュニケーションをとろうとしているのかを考えることは，支援の出発点（原点）だ。 ・行動障害には原因がある。見えるところではなく，見えないことこそ意味がある。 ・悪いところを直そうとせず，良いところを見つけて伸ばす着眼点が印象に残った。 ・どうしても支援する側の都合になってしまいがちだが，その方の生活の流れにのって，世界をみることが大切だ，ということがわかった。 ・マイナス思考ではなく，すべて一つひとつ，障害児・者の行為が意味あることだ。 ・まだ自分にできることはある，と思った。 ・ヒヤっ，ドキっとすることがたくさんあった。
【虐待の仕組みについての理解】
・虐待防止ではなく，虐待をしてしまった時，虐待をしそうになった時に，自ら認め，話せること，話しやすい環境をつくることが大切であることがわかった。 ・本人に原因があるのではなく，背景，環境，スタッフ側に原因がある。本人を丁寧にアセスメントすることによって本人のストレングス，好みを知ることができる。 ・感じ方ひとつで虐待を防止できる。散髪の話を聞いたとき，支援者のその場しのぎや強引な支援があると聞き，自分も当てはまると思った。 ・自分は絶対虐待をしていない，自信がある，と思っていることが怖いと思った。 ・行動障害が，支援者によって誘発されているという内容は，非常に納得できた。 ・支援者という環境要因が本人の行動障害を誘発しそうな場面に，事前に支援することの迷いがあったが，自己肯定できた。 ・虐待についての視点が変わった。 ・虐待の芽に気づく感性の鋭さを磨く必要がある，という言葉が心に響いた。 ・虐待は他人事ではなく，自分の中からうまれること，その可能性があることが理解でき，取組の重要性が身につまされた。 ・合理的，科学的，冷静に観ること，分析することが虐待防止につながると思った。

【個人レベル】
物事を側面から捉えるようにしていく。
個々の障害を理解し，一人ひとりに向き合う。
どんな人にも人格があることを忘れない。
ポジティブアプローチ，ポジティブアセスメントをする。
虐待の芽を，「自分から伝える，表す，相談する」。
本人の好きなこと，強みを理解する。
感性を磨き，能動的に動く。
表面上の行動に捉われず，背景を踏まえる。
自ら認め，気づき，話すことについて，支援者としても家族としても，忘れない。
自分の支援は，風通しがよいか見直す。
無理やり，強引に，支援しない。

相手の価値観を深く考え，自分の意識を変容する。
ABA（応用行動分析）を念頭に置く。

【チームレベル】
職員のアイデンティティを変える。
温度や湿度，視覚での見通しをつける。視覚提示に現物をとり入れる。
自分の主観で完結せず，周りの人に伝達や相談，指摘をもらうことを大切にする。
行動障害の糸口や予防，適切な支援につなげたい。
専門性の高度化，利用者への理解，思いやりにつなげていく。
「人生」「命」「福祉」について，恥ずかしがらずに現場で共有する。
みんなが，楽しく充実した生活ができるように大切に考えていきたい。
権利擁護等，後見業務での課題の一端を見いだせたので，役立てたい。
生きにくさを理解し，適切な環境を支援によって，障害者の幸せを創出する。
支援者は伴走者であり，本人の意思を大切に日々の業務に携わっていく。

【意見、感想】

・合理的，科学的なアプローチの話を聞いたとき，私の支援では感情的になってしまう部分が強く出てしまう場面が多くあった。利用者さんたちに安心していただけるような支援をしたい。
・慣れ合いで支援している場面がここ最近あったように感じたが，今回研修で「生きること」を感じ，自分も今より少しでも楽しみ，利用者さんたちと生を感じて楽しめるような支援をしたい。
・障害のある人の生きにくさ，特性，自尊心，楽しみ・・・について理解を深めたい。
・問題行動，行動障害は，周囲が付きあっていくということを確認できた。
・（野澤さんの）本を読んでみる。
・福祉の現場で働く人が，自分の仕事に自信がもてるようにしていくことが大切だ。
・ALS の岡部さんが，学生の質問に応えた「体が動かないより心が動かない方が不幸」という言葉や，「生きることを選んでから，生きる意味を考える」という言葉が，印象に残った。
・障害特性の理解は高齢認知症の理解に通じることがわかった。
・支援者にとって自分の価値をどこに置くか，自分自身を振り返る機会になった。
・子供たちの保育をしている中での支援の仕方，安心感を共に作ること，育ちあうことの意味が少しわかったように思った。
・たくさんのエピソードに胸が熱くなった。
・障害のある人が，前向きな明るい気持ちで，自分の人生を楽しめるように支援をしていきたいと思った。

④その他、今後の研修で取り上げて欲しい内容や研修会への要望等ご自由にお書きください。

・行動障害について学びたい。
・今回の第二弾（野澤先生）をお願いしたい。
・発達障害の方との関わり方について研修をしてほしい。
・障害当事者の方にも話をしてもらいたい。
・（当事者の親としては）人材育成をしてほしい。

・野澤さんに研修のコーディネーターをしてもらいたい。
・自閉症，強度行動障害について，ワーカーが支援の中に入れるようなスキル，学びを研修でやってほしい。
・子供の食事について（乳幼児，栄養，摂取危険な食品）の研修をお願いしたい。
・児童福祉分野（保育関係者）に焦点をあてた研修を希望する。
・職員向け研修をしてほしい。

⑤所属している団体についてお教え下さい。（アンケート回収分：58 名）

行政	2 名
障害福祉分野	30 名
高齢福祉分野	6 名
児童福祉分野	18 名
教育機関	1 名
その他(当事者ご家族/無記名等)	3 名
合計	58 名

以上